

『為楽庵雪川句文集』の紹介

伊藤善隆

(立正大学)

摘要

松江藩七代藩主松平治郷（不昧）の弟で俳人として知られる為楽庵雪川（松平衍親）の自筆句文集（卷子本一卷、寛政頃の成立か、個人蔵）を翻刻紹介する。

キーワード…俳諧、為楽庵雪川、松平衍親、『為楽庵雪川発句集』、『為楽庵俳諧文集』

はじめに

為楽庵雪川（宝暦三年（一七五三）～享和三年（一八〇三））は、松江藩六代藩主松平宗衍の三男で、七代藩主松平治郷（不昧）の弟である。幼名は駒次郎、長じて衍親、別号を不為軒、埜白庵、雲間と称した。本稿ではその句文を自筆で記した卷子本一卷を図版とともに紹介する。雪川の筆跡資料として貴重なものである。

本点に収録された発句は全三十一句。そのうち、通し番号の8・9・22・23・26・28・31の七句以外は、雪川の没後の文化二年（一八〇五）に刊行された『為楽庵雪川発句集』（全四冊。『為楽庵雪

川発句集 乾一（一三）と『為楽庵俳諧文集 坤』で構成）に収録されている。ただし、両者を比較すると、漢字の宛方や仮名遣い等の違いを除いても、前書きや句形に異同があるものがある。

まず前書の異同だが、『為楽庵雪川発句集』では、3に「雲陽にありし時、山ぶみして田部何某かもおほつかなかもたつねて」、5に「同妙見堂法楽」、11に「出雲にありし時」、14に「百万が、白露のしらで上るよ草の穴、といへるがうら山しさに」、18に「相州の温泉に遊びて」、19に「いろ／＼の花を筒に入れておくられたる方へ申遣す」、21に「いふ日さびしき秋の水かな」とある。18は、句を詠んだ場所が異なるので、どちらかの句をどちらかに転用したものかもしれない。また、16・17は、『為楽庵雪川発句集』では並んで収録されて

おらず、したがって「良夜二句」という前書はない。さらに、本点では前書を付すが、『為楽庵雪川発句集』では付さないものが、20・29・30である。なお、比較的前書の長い10・13・15にも小異があるが、いずれも大意は同様のため、ここで詳細に示すことは略す。

つぎに句形の異同をあげると、『為楽庵雪川発句集』は、11の中七を「かつミ見ざるかや」、24の中七を「木の間の月よ」、29の中七を「をのれと折て」とする。なお、以上『為楽庵雪川発句集』の本文は、webで画像を公開している東京大学総合図書館酒竹文庫本を参照した。

本点の成立年次や、雪川に本点を求めたという三玄齋（本点奥書参照）については、目下不明である。なお、雪川には、寛政三年（一七九二）十一月の治郷の参勤交代に従って江戸から出雲に赴いた際の「雲陽紀行」（『為楽庵誹諧文集』所収）がある。確たる証拠はないが、ひとまずは本点もこの参勤交代の折、もしくは比較的近い時期の成立ではないかと推測しておく。この点については、今後も検討が必要である。

なお、本点は、平成元年（一九八九）四月二十三日～五月十四日に島根県立博物館で開催された「祝 松江市制百周年 不昧公顕彰 出雲美術名品展」で展示されたことが、同展の図録（松江美術商共同組合発行）により確認できる。すなわち、同書43頁に「99 雪川 俳句巻物」として「喫茶去」から末尾までを撮影した図版が一枚掲載されている。

〈書誌〉

書型……卷子本一巻。二八、六cm×五一、五、〇cm。

表紙……濃縹色緞子表紙（草花模様を織り出す）。

題簽……なし。

見返し……香色料紙に金箔を散らす。

奥書……「応三玄庵主人需、不為軒埜白雪川書之」。

〈凡例〉

翻刻にあたり、適宜、句読点、濁点を補い、改行を改めた。なお、13の前書中の「ひはへのごろにて」の「こ」のみ、原本にある濁点である。

異体字は通行の字体に、片仮名は平仮名に適宜改めたが、一部に原本の書体を残した。

便宜的に、収録された発句に、私に通し番号を付けた。

参考のため、原本の図版を末尾に示した。

〈翻刻〉

- 1 元日に艸をたづぬる胡蝶哉
- 2 柴樵の休めば墻や埜路の梅
松笠と云ふ孤村に滝ありとて、樵路棧道のさかしきを、おぼつかなくも過ぎ越して、よし田といえる幽里に田部何某と申す者あり。渠が舎をもとめて
- 3 呼子鳥花に引く巢をたづねけり
かの瀑布のもとにて
- 4 千丈の霞岩うつしぶきかな
神門郡妙見山に遊びて
- 5 この山は南をさすや花の星
- 6 水一影のやなぎにとゞく柳哉

7 何処にやら月ある春の夜雨哉
8 在明も明星もなしほとゝぎす

9 浪暑し岩に鷗の身をさます
松江の大湖を望て

紫陽花や藪を小庭のと俳祖蕉翁の申されしがうらやましく、
あやしの舎をたくみ、唯膝入る、斗の席こそおもしろけれ
と、壺中に乾坤をたゝみ、又は橋中に圍碁をたのしむこと、
みな広太の界ならんと、維摩の室に矩規を入れ、方九尺之う
ちに壺も橋もこめ、埜白堂と号し、宵過るまで下涼して
10 別坐鋪松吹き越して薰る月
雲陽にて賀端午

11 かの花かつみのむかしを思ひて
12 国人のかつ見ざるかや葺菖蒲
薜や破れぬほどの花に風

虫おくり横笛といえるむしを此国にて実盛と云ひ伝ふるこ
とを、東武の客僧旨原がおかしくも面白も仮名書につゞり
合、予に見せつるを、むげにうち捨んことの心にくしと、つ
くく彼虫を思ふに、容ちいと細く色青し。一燈の下に飛行
して田圃をほしいま、になすといへども、直に歩む事あたは
ず。横這をする故に、ははふに通ひ、ひはへのごろにて横ぶ
えと云へるか。又は笛竹の青きことなるたとへなるか。青
葉小枝など聞ふる名笛ありつる故か。または音もなきむしを
笛と云へる事を思へば、むかし平氏の侍に滝口何某といえる
者ありける。おなじ頃、横ぶえとなん云ふ女にふかく契りを
こめけるが、ほどなく滝口は出家してけるを、あらぬことに

や思ひけん。横笛もさまをかえ、都嵯峨野に入りてたのみ有
る幽室にて、めでたき終りをとげしなど、彼物語にも見へ
たり。京府は市街ひまなく、建てひろごりたるなれば、おふ
けなき御おん方も嵯峨に遊び給ひては女郎花の一時を詠めら
れ、糸萩の一日をおしみ、あすも来んと愛られけるも外なら
ず。あるは山くくの菌に狩りくらし、月の赤きに興じては、
いろくくのむし撰まれたることも有り。されば、かの横笛も
嵯峨野に住める虫なれば、是かれを思ふに、魂の禽獸に生を
かゆること倭漢そのためしあるなれば、ほとゝぎすを蜀魂と
書頭はすも其霊のいちじるき故なれば、原が興せしごとく、
げぢくを梶原と呼ぶも、此むしの横笛と呼はる、も実盛と
云はる、も、みなよき時代のことわざなればと、魂祭のため
くごに杜撰方言をかいなぐりて独笑することを

13 横笛も実盛もあらん魂まつり
14 あぶなさに露面白し草の折れ

雨そほ降ける夜半、孤雁のはるかに啼きて、いづちへか過ぎ
ぬるぞ、あれこそ酒肆へ行くなめり。又声かる、斗息をばか
りに飛行くは、百里之外に出て今こゝもとに來るならん。是
ぞ陣中に羽撤を送る使ひなるべしと、つくく晋子其角が佳
吟をうらやむ

15 いく連の雨夜の雁や越後勢

16 良夜二句

17 白鷺は闇のからすよけふの月
18 提灯で通る人有りけふの月
19 江南の玉造に浴みせし時

- 18 夜寒さや月出る声の山鳥
いろ／＼の種を筒に入れて送られたる方へ申遣す
- 19 よれ咲や香もむつかしき菊ながら
返事かくとて
- 20 きくの句に硯の魂を鎮めけり
夕日寂しき秋の水かなと詠めるにすがりて
- 21 花蓼や秋をとゝむる沢の水
日よしと云ふ所にて
- 22 山郷は鱖洪び菌蕎麦時分
武さしの友人青牛が方へ状認るとて
- 23 しぐれ月と状に書くさえ誠也
- 24 水に又木の間の月や落葉陰
- 25 さま／＼の木葉つきたる水かな
跡よりはる、野路のむら雨
- 26 いそぎ来てわたしにぬる、時雨哉
- 27 こがらしのすゑ埜を吹くや雉の声
杵築の浦づたひし侍りて
- 28 飛ぶ形に沖は風ある千鳥かな
喫茶去
- 29 つぐ墨のおのれと落て風情哉
山家
- 30 雪の日やしらぬ獣のあしの跡
- 31 海の雪つもるともなく暮れにけり

此句どもは、去年之冬、治郷の君、公之いとま給り帰国ましける刻、

予もいざなはせ、めぐりせんなどおせありけるほどに、其驥尾に取付、山川之風雪をいこひ、からうじて八雲たつ境に至り、松江城之後園に室をかまへ、一机寒燈の下に暮行としのありさま、往かふ人の足を空に在せるより、春は山際紫だつ且も過ぎ、垣根のうの花もうつろひ、軒端をめぐる風のおとづれにおどろくまでも、時々の景物、折／＼の風狂の野作を書き捨たる反古どもをかき集め、薄墨拙毫に罪を顕はれしつるも、文車之文、塵塚の塵ひろしも、見る人にこそあらめと、応三女庵主人需、不為軒埜白雪川書之。

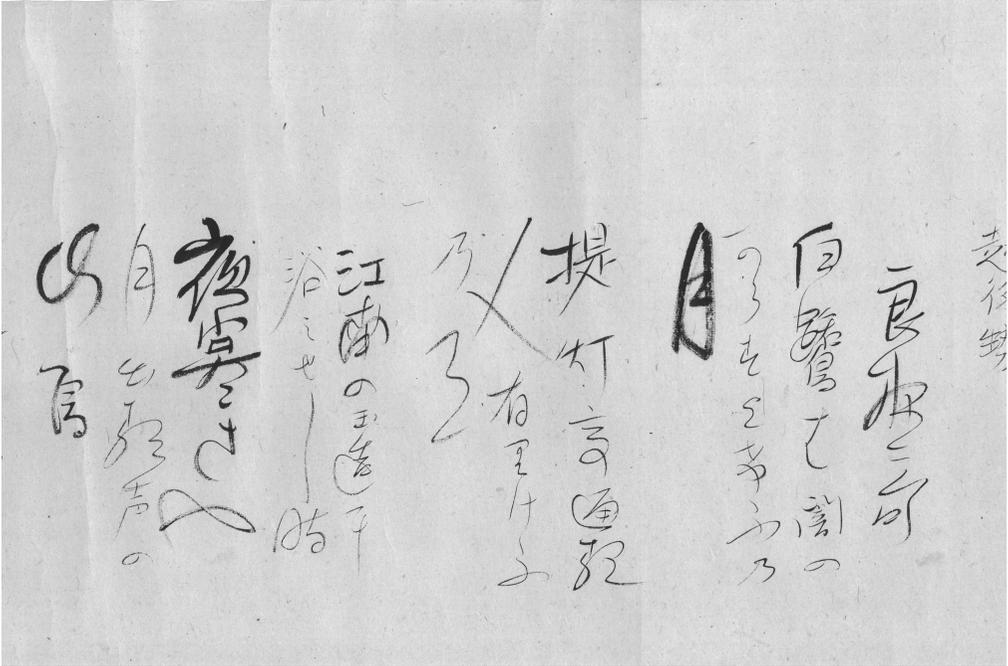
〔東西／南北／之人〕（残） 〔俳諧／三昧〕（残）

〈付記〉

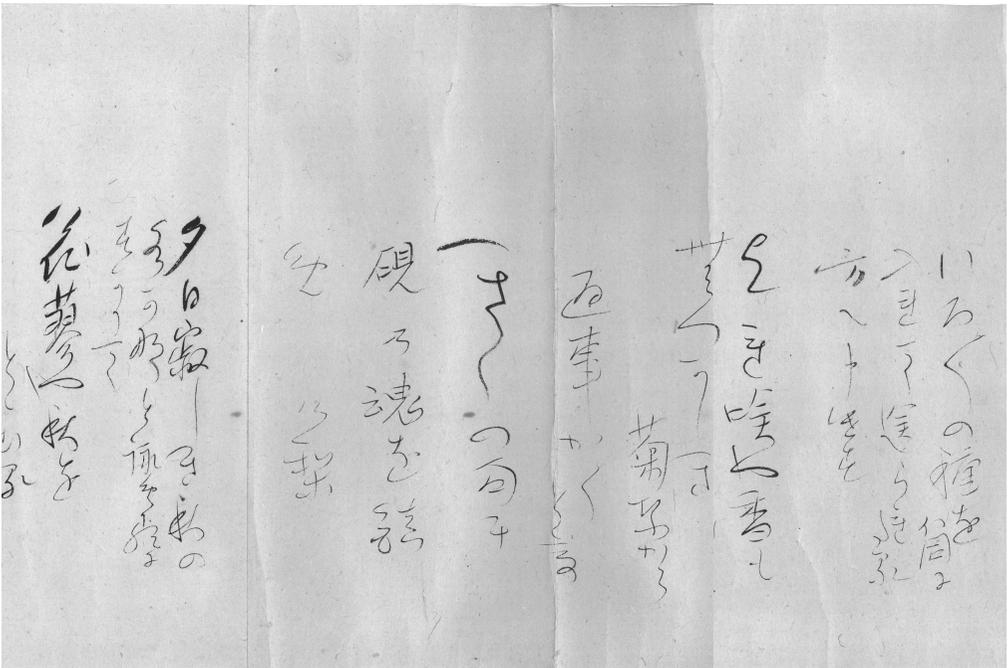
本稿をなすにあたり、難読箇所に関して、稲葉有祐氏から御教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田中則雄）、および JSPS 科研費基盤研究（C）22K00327 の研究成果の一部である。

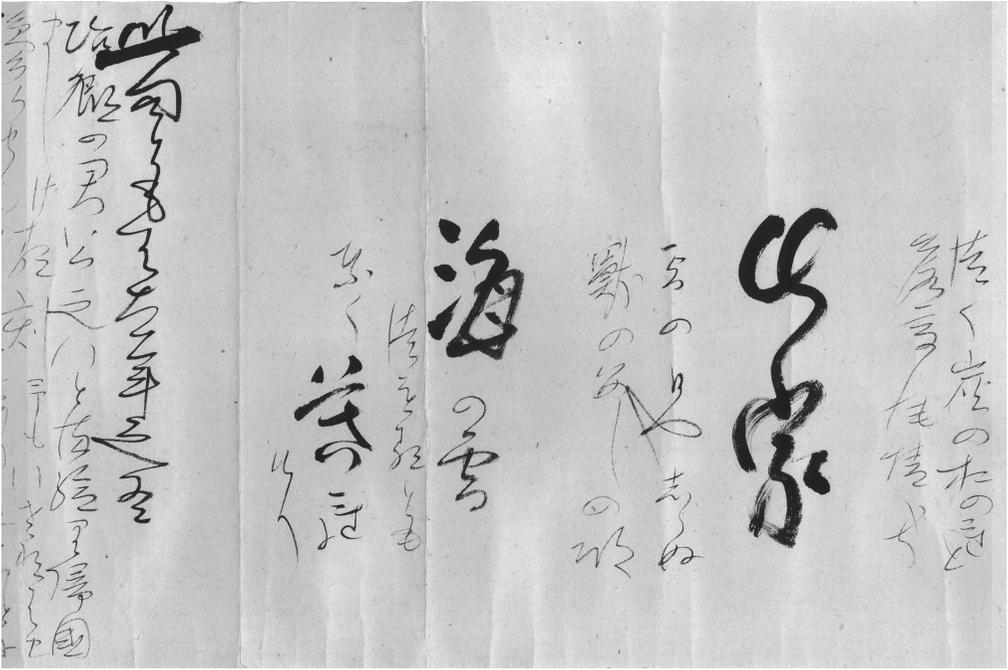
(図版7)



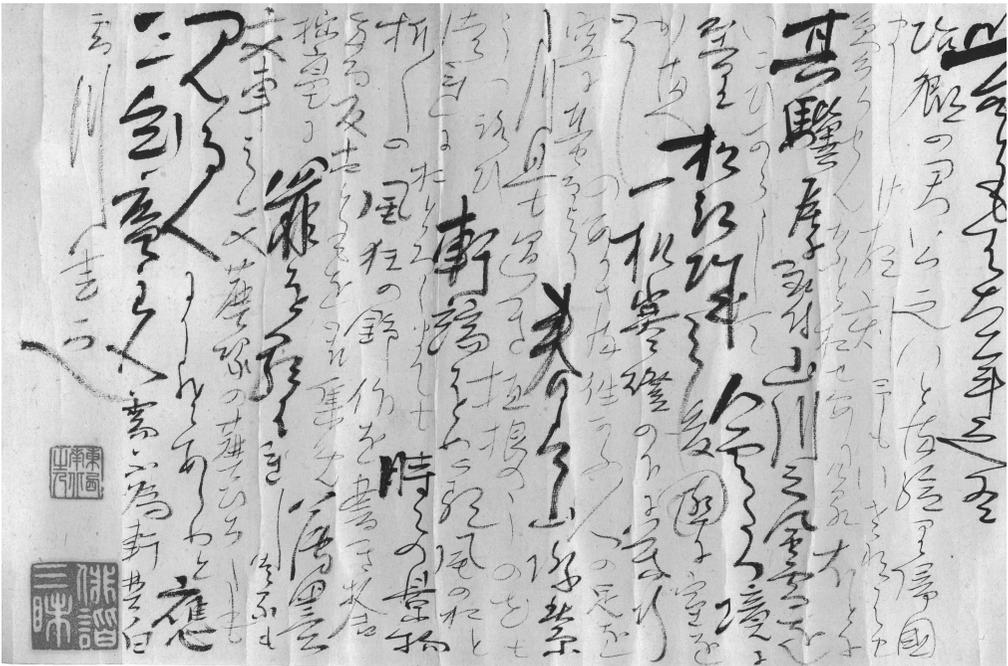
(図版8)



(図版11)



(図版12)



“Irakuan Setsusen kubun-shu” : reprint and introduction

ITO Yoshitaka
(Rissho University)

[Abstract]

“Irakuan Setsusen kubun-shu” is a handwritten collection of haiku works by Matsudaira Setsusen (1753-1803). Matsudaira Setsusen was the third son of Matsudaira Munenobu, the sixth lord of the Matsue domain, and the younger brother of Matsudaira Harusato (Fumai), the seventh lord of the Matsue domain.

Keywords: Haikai, Irakuan Setsusen, Matsudaira Chikanobu, “Irakuan Setsusen hokku-shu”, “Irakuan haikaibun-shu”